

平成18年度「薬と健康の週間」における 全国統一事業の結果（概要）

平成19年6月
(社)日本薬剤師会

平成18年度の「薬と健康の週間」(平成18年10月17～23日)では、平成15～17年度に引き続き、全国統一事業として、

- ・薬局・薬店における事業(一般用医薬品提供時の“薬剤師の相談業務”に関するデータ及び相談事例の収集)
- ・薬剤師会における事業(各種イベント会場での「お薬相談」の実施等)

を行いました。

この程、その結果(概要)がまとまりましたので、ご報告いたします。

・薬局・薬店における事業(一般用医薬品提供時の“薬剤師の相談業務”に関するデータ及び相談事例の収集)

平成18年度の全国統一事業には8,772軒の薬局・薬店が参加し、参加薬局・薬店において、1日当たり約15万7千人が一般用医薬品を購入し、このうち約3万7千人が何らかの相談・質問を行ったことが明らかになりました。(表1)

これを全国の薬局・薬店数62,610軒(平成17年度末)に当てはめると、全国の薬局・薬店では1日平均112万2千人が一般用医薬品を購入し、そのうち26万4千人が何らかの相談・質問を行っていることとなります。この数字は、一般用医薬品の提供に際して、薬局・薬店の薬剤師が必要な情報提供や服薬指導を行った上で、患者からの質問や相談に答え、医薬品の適正使用に貢献していることを実証するものであると考えられます。

〔表1〕薬局・薬店における一般用医薬品に関する相談・質問の状況

参加薬局・薬店数	8,772軒
1日当たりの一般用医薬品購入者数	157,244人
一般用医薬品購入者数のうち相談・質問者の数	36,918人

注1)各薬局・薬店には「薬と健康の週間」中の任意の1日についての報告を求めているため、調査結果は1日当たりの平均のもの

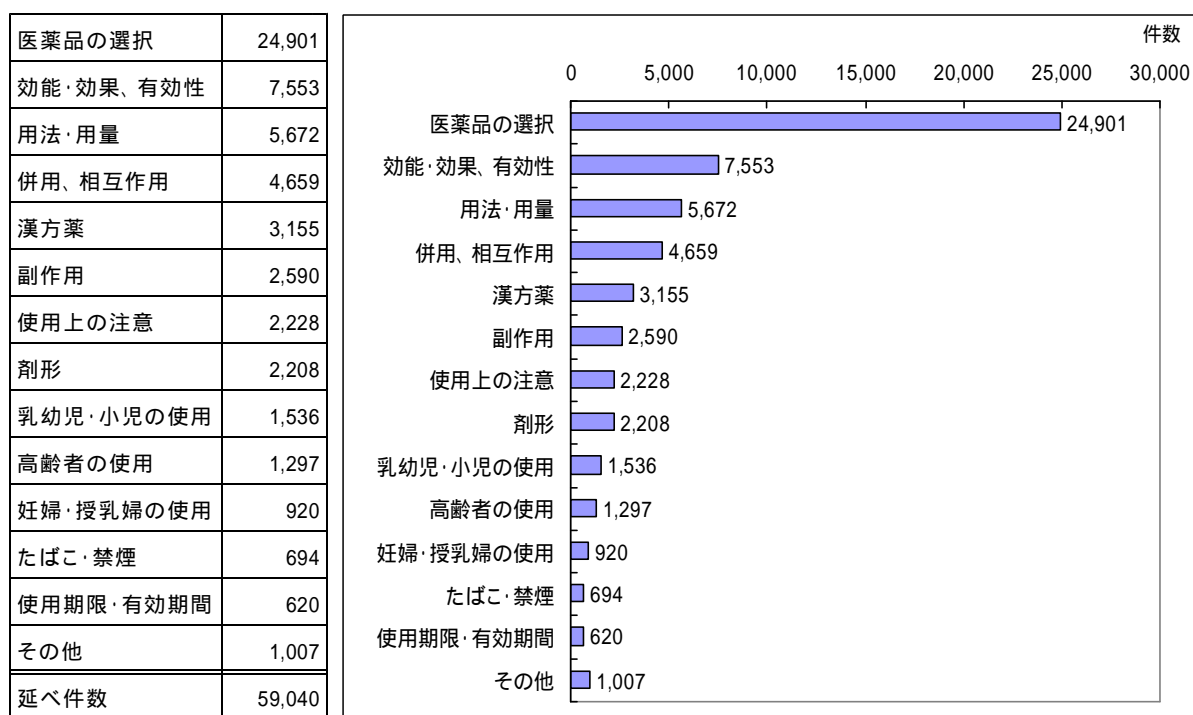
注2)薬店は「一般販売業」のみ。以下同じ

注3)購入者数には、相談の結果、医薬品を購入しなかった場合を含む

一般用医薬品についての相談事例を内容別にみると、「医薬品の選択に関するもの」が24,901件と最も多く、一般用医薬品についての相談件数延べ59,040件の42.2%を占めています。次いで、「効能・効果、有効性に関するもの」7,553件(同12.8%)、「用法・用量に

関するもの」5,672件（同9.6%）、「併用、相互作用に関するもの」4,659件（同7.9%）、「漢方薬に関するもの」3,155件（同5.3%）、「副作用に関するもの」2,590件（同4.4%）、「使用上の注意に関するもの」2,228件（同3.8%）、「剤形に関するもの」2,208件（3.7%）などが多くなっています。（表2、図1）

〔表2〕〔図1〕一般用医薬品に関する相談・質問の内容別内訳（複数回答）



最も多かった「医薬品の選択に関するもの」では、患者の症状の訴えから薬剤師が適切と思われる一般用医薬品を選択するもののほか、病気への影響を考慮して適切な一般用医薬品を選択するもの（「緑内障なのだが、疲れ目に効く目薬を選択してほしい」等）

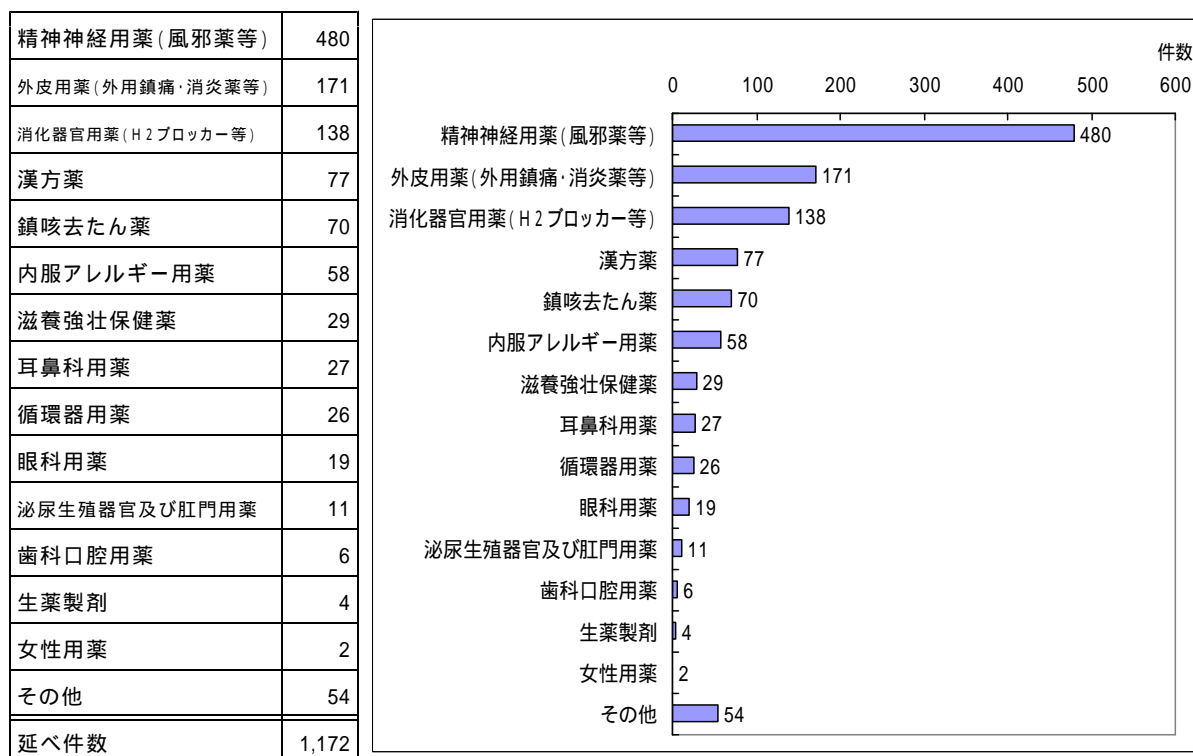
副作用歴・アレルギー歴を考慮して適切な一般用医薬品を選択するもの（「アスピリン喘息でも服用できる風邪薬はどれか」等）、患者のQOLに関する希望を踏まえて一般用医薬品を選択するもの（「眠くならない頭痛薬はあるか」等）、応急措置を尋ねるもの（「（夜間・休日のため）明日には医療機関を受診するが、それまでの対応として一般用医薬品を使用したい」等）、その他（「ドーピング検査に反応しない解熱鎮痛剤がほしい」、「常備薬として適切な医薬品を選んでほしい」等）などの相談が多数見られました。

また、「相互作用に関するもの」では、高血圧、糖尿病、高脂血症等の生活習慣病や、リウマチや胃炎・胃潰瘍などの疾患で処方薬を常用している患者に対して、薬剤師が処方薬を聞き取り、医療用医薬品と一般用医薬品の相互作用や成分の重複を確認した上で、併用しても問題のない一般用医薬品を選択する（又は販売しない）事例が多く見られました。なお、薬局で管理している「薬歴」や患者の「お薬手帳」により、服用中の医薬品を正確に把握できたケースが多くの薬局より報告されています。

次に、副作用に関する相談事例（2,590件）のうち、対象薬剤の薬効別分類が判明した1,172件を「薬効分類別」にみると、最も多かったのは精神神経用薬（風邪薬等）の480件でした。以下、外皮用薬（外用鎮痛・消炎薬等）171件、消化器官用薬（H2ブロッカー等）138件などが多くなっています。

ただし、これらの件数は副作用の発生率を表すものではなく、もともとの使用量の多さが報告件数の多さを反映しているものと考えられます。（表3、図2）

〔表3〕〔図2〕副作用の相談のあった一般用医薬品の「薬効分類別」件数



注1) 副作用に関する相談事例のうち、対象薬剤の薬効別分類が判明したもの

注2) 件数は副作用の症状の数

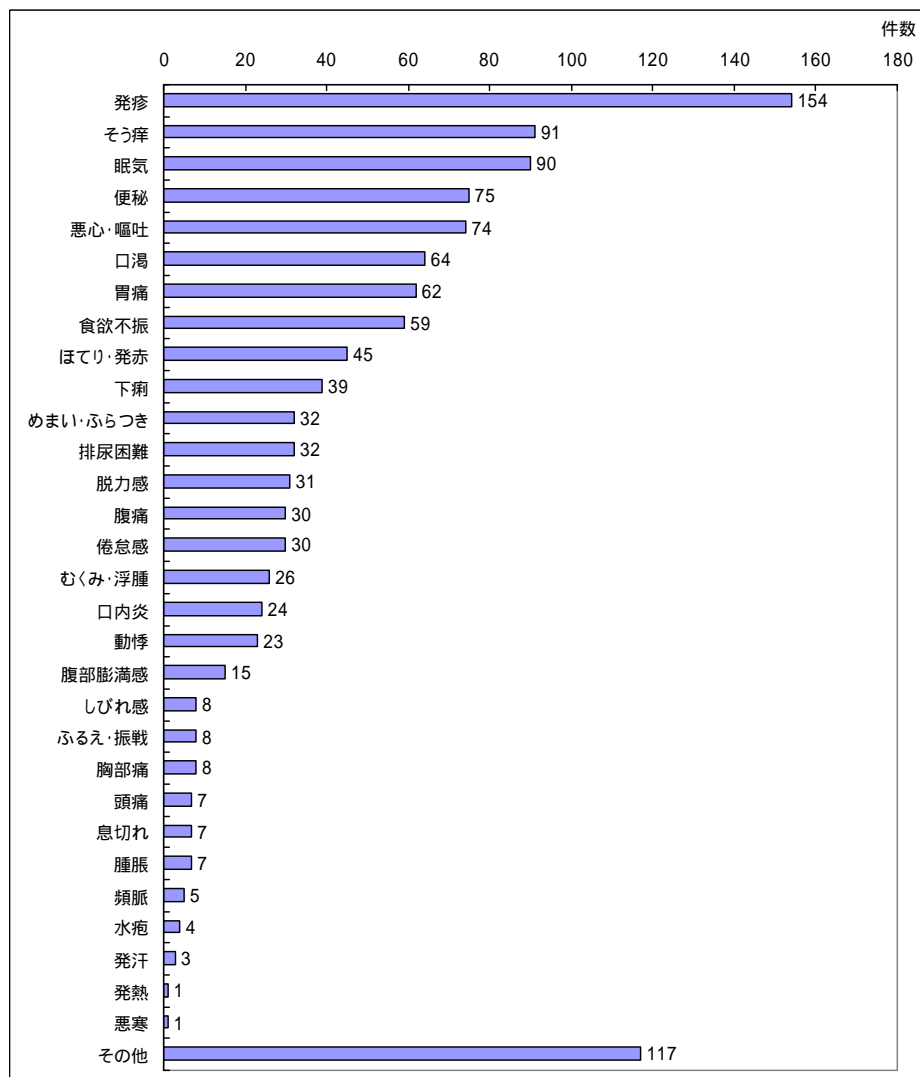
一方、患者等から相談のあった「副作用の主な症状」(複数回答)を見ると、「発疹」が154件と最も多く、以下「そう痒」91件、「眠気」90件、「便秘」75件、「悪心・嘔吐」74件、「口渇」64件、「胃痛」62件、「食欲不振」59件などの順となっています。

ただし、これらの件数は副作用の発生率を表すものではありません。（表4、図3）

〔表4〕〔図3〕副作用の主な症状（複数回答）

（件）

発疹	154	そう痒	91	眠気	90
便秘	75	悪心・嘔吐	74	口渇	64
胃痛	62	食欲不振	59	ほてり・発赤	45
下痢	39	めまい・ふらつき	32	排尿困難	32
脱力感	31	腹痛	30	倦怠感	30
むくみ・浮腫	26	口内炎	24	動悸	23
腹部膨満感	15	しびれ感	8	ふるえ・振戦	8
胸部痛	8	頭痛	7	息切れ	7
腫脹	7	頻脈	5	水疱	4
発汗	3	発熱	1	悪寒	1
その他	117	延べ件数	1,172		



注) 副作用に関する相談事例のうち、対象薬剤の薬効別分類が判明したもの

上記の「副作用の相談のあった一般用医薬品の『薬効分類』件数」と「副作用の主な症状の件数」の相関、すなわち、どのような一般用医薬品でどのような副作用の発現が疑われたのかをみると、多い組み合わせは下記のとおりでした。(表5)

〔表5〕副作用の相談のあった一般用医薬品の「薬効分類」と「副作用の主な症状」

風邪薬(216)	眠気(31)、便秘(25)、発疹(21)、食欲不振(13)、口渇(13)、悪心・嘔吐(12)、排尿困難(11)、胃痛(10)、そう痒(9)、下痢(8)、脱力感(8)、倦怠感(5)、動悸(5)
解熱鎮痛薬(191)	胃痛(30)、発疹(21)、悪心・嘔吐(17)、めまい・ふらつき(11)、眠気(11)、食欲不振(10)、便秘(8)、口渇(8)、そう痒(6)、むくみ・浮腫(6)
漢方薬(77)	食欲不振(9)、発疹(8)、悪心・嘔吐(7)、むくみ・浮腫(6)、胃痛(5)、倦怠感(5)
鎮咳去たん薬(70)	便秘(16)、口渇(9)、発疹(8)、眠気(8)、そう痒(4)、ほてり・発赤(3)、排尿困難(3)
その他の外皮用薬(64)	そう痒(22)、発疹(18)、ほてり・発赤(11)
内服アレルギー用薬(58)	眠気(13)、口渇(8)、排尿困難(7)、発疹(4)、便秘(3)、脱力感(3)
H2ブロッカー(52)	食欲不振(6)、胃痛(5)、発疹(4)、悪心・嘔吐(4)、便秘(4)、腹痛(4)
外用鎮痛・消炎剤(51)	そう痒(16)、発疹(14)、ほてり・発赤(7)
水虫・たむし用薬(40)	発疹(13)、そう痒(9)、ほてり・発赤(8)
鎮静薬(39)	悪心・嘔吐(5)、食欲不振(5)、眠気(5)、めまい・ふらつき(4)
胃痛鎮痛鎮痙薬(36)	発疹(6)、下痢(4)、便秘(3)、腹痛(3)、眠気(3)、倦怠感(3)、排尿困難(3)
その他の精神神経用薬(34)	めまい・ふらつき(4)、眠気(4)、悪心・嘔吐(3)、食欲不振(3)、便秘(3)、口渇(3)、倦怠感(3)

注1) ()内の数字は報告件数

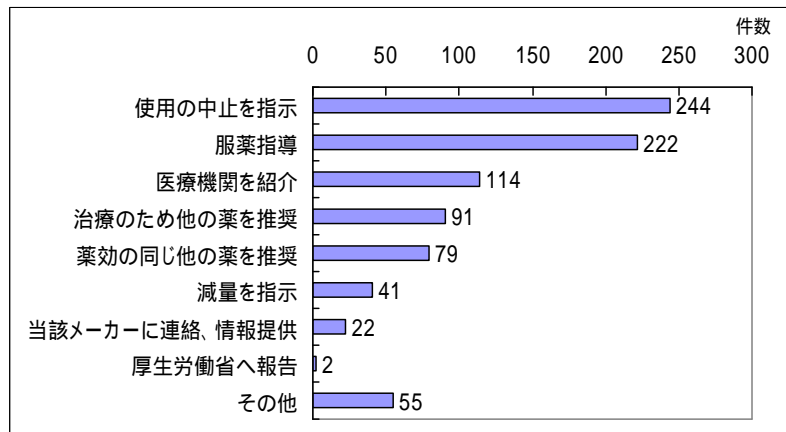
注2) 副作用に関する相談事例のうち、対象薬剤の薬効別分類が判明したもの

注3) 副作用の症状は相談の件数が多かった主なもののみ掲載

これら副作用に関する事例では、過去に経験した副作用の回避、注意すべき副作用、長期連用などに関する相談が多く、薬剤師は「使用中止を指示」、「正しい医薬品の使い方等を説明」、「医療機関を紹介」などの対応をとり、副作用の早期発見や重篤化防止に努めるほか、「当該メーカーへの連絡」を行うなど、適切な措置をとっていることが明らかになっています。(表6、図4)

〔表6〕〔図4〕薬剤師のとした措置（複数回答）

使用の中止を指示	244
服薬指導	222
医療機関を紹介	114
治療のため他の薬を推奨	91
薬効の同じ他の薬を推奨	79
減量を指示	41
当該メーカーに連絡、情報提供	22
厚生労働省へ報告	2
その他	55



注1) 副作用に関する相談事例のうち、対象薬剤の薬効別分類が判明したものについて薬剤師のとした措置

注2) 件数は相談のあった患者に対する措置件数

・薬剤師会における事業（各種イベント会場での「お薬相談」の実施等）

(1) 「お薬相談」の実施

都道府県薬剤師会並びに支部薬剤師会における「お薬相談」については、「薬と健康の週間」中に289ヵ所で延べ441回行われました。内訳は、都道府県主催のものが28ヵ所で延べ40回、支部薬剤師会主催のものが261ヵ所で延べ401回でした。（表7）

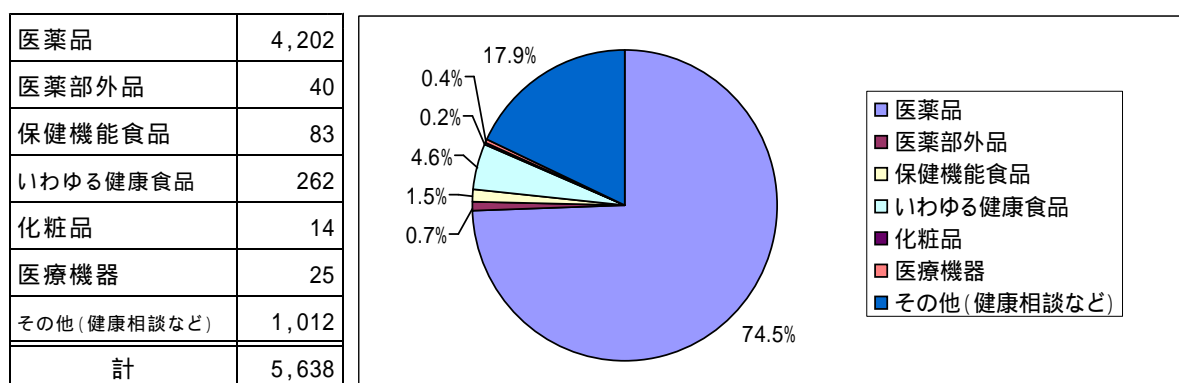
〔表7〕「お薬相談」の実施件数

	都道府県薬剤師会	支部薬剤師会	計
実施した薬剤師会	28ヶ所	261ヶ所	289ヶ所
延べ実施回数	40回	401回	441回

参考：支部薬剤師会は全国で約740支部

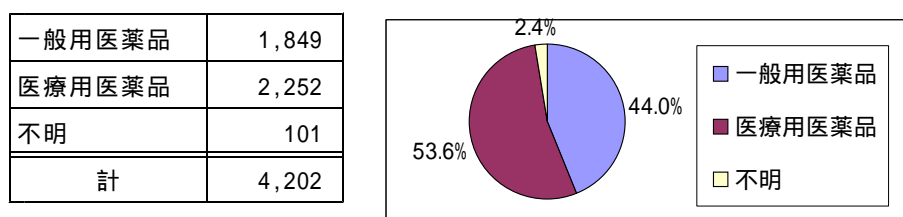
延べ441回の「お薬相談」で受け付けた5,638件の相談事例を、質問・相談の内容別にみると、「医薬品に関するもの」が4,202件（全相談件数の74.5%）、「いわゆる健康食品に関するもの」が262件（同4.6%）で、保健機能食品、医薬部外品、医療機器、化粧品等に関する相談は比較的少数でした。（表8、図5）

〔表8〕〔図5〕相談・質問の内容



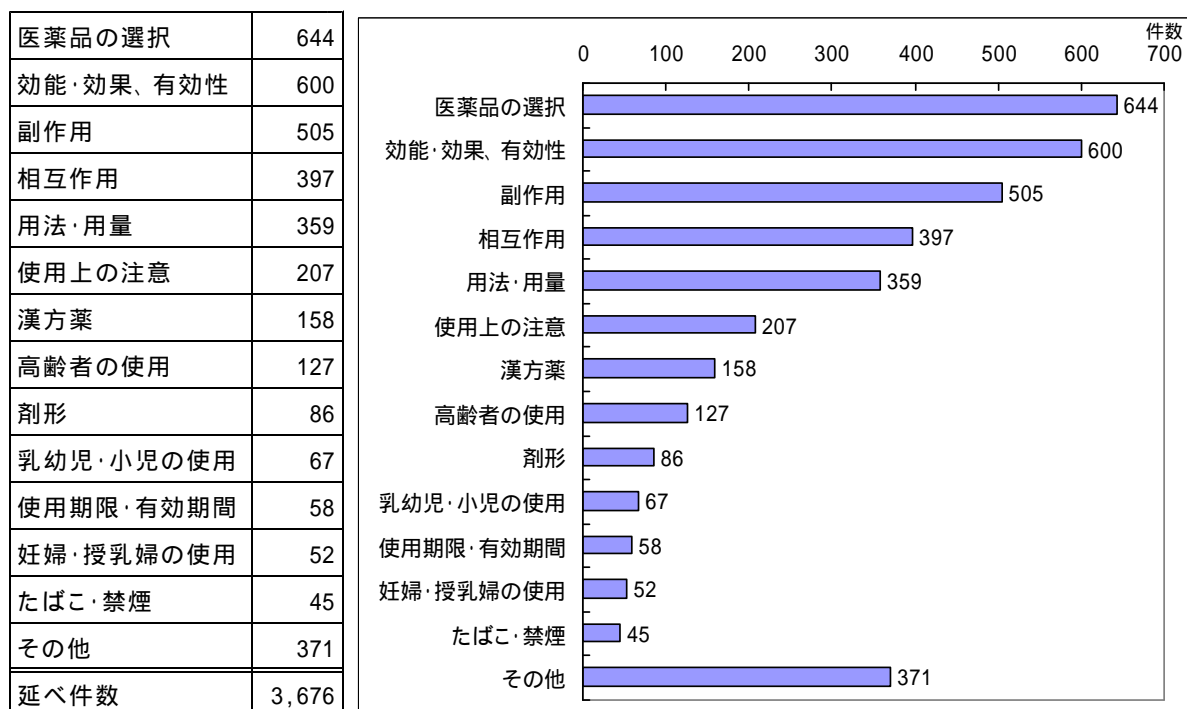
さらに「医薬品」に関するものの内訳をみると、「医療用医薬品」が2,252件（医薬品に関する相談件数の53.6%）、「一般用医薬品」が1,849件（同44.0%）で、「不明」は101件（同2.4%）でした。（表9、図6）

〔表9〕〔図6〕医薬品についての相談の内訳



「一般用医薬品に関する相談・質問」を相談内容別にみると、「医薬品の選択に関するもの」が644件（一般用医薬品についての延べ総相談件数3,676件の17.5%）と最も多く、以下、「効能・効果、有効性に関するもの」600件（同16.3%）、「副作用に関するもの」505件（同13.7%）、「相互作用に関するもの」397件（同10.8%）、「用法・用量に関するもの」359件（同9.8%）などが上位を占めました。（表10、図7）

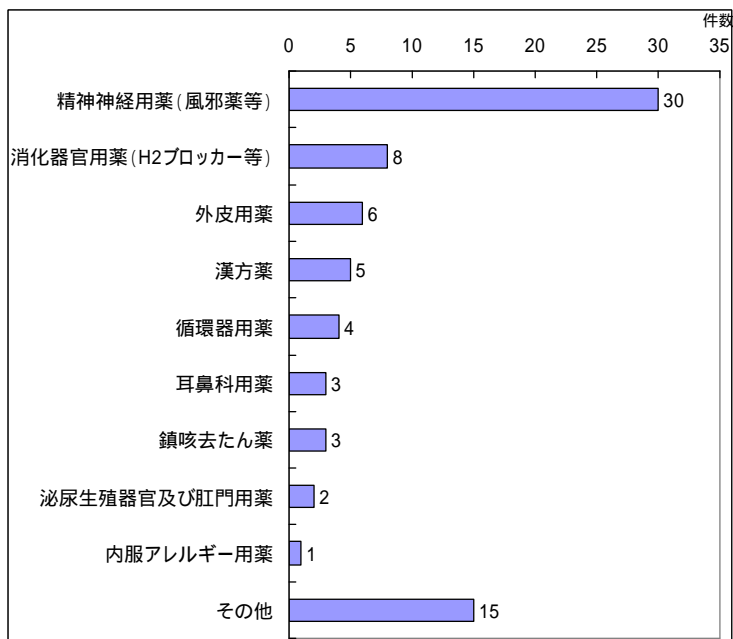
〔表10〕〔図7〕一般用医薬品に関する相談・質問の内容別内訳（複数回答）



次に、副作用に関する相談事例（505件）のうち、対象薬剤の薬効別分類が判明した77件を「薬効分類別」にみると、最も多かったのは精神神経用薬（風邪薬等）の30件でした。以下、消化器官用薬8件、外皮用薬6件、漢方薬5件、循環器用薬4件の順となっています。ただし、これらの件数は副作用の発生率を表すものではありません。（表11、図8）

〔表11〕〔図8〕副作用の相談のあった一般用医薬品の「薬効分類別」件数

精神神経用薬(風邪薬等)	30
消化器官用薬(H2ブロッカー等)	8
外皮用薬	6
漢方薬	5
循環器用薬	4
耳鼻科用薬	3
鎮咳去たん薬	3
泌尿生殖器官及び肛門用薬	2
内服アレルギー用薬	1
その他	15
計	77



注1) 副作用に関する相談事例のうち、対象薬剤の薬効別分類が判明したもの

注2) 件数は副作用の症状の数

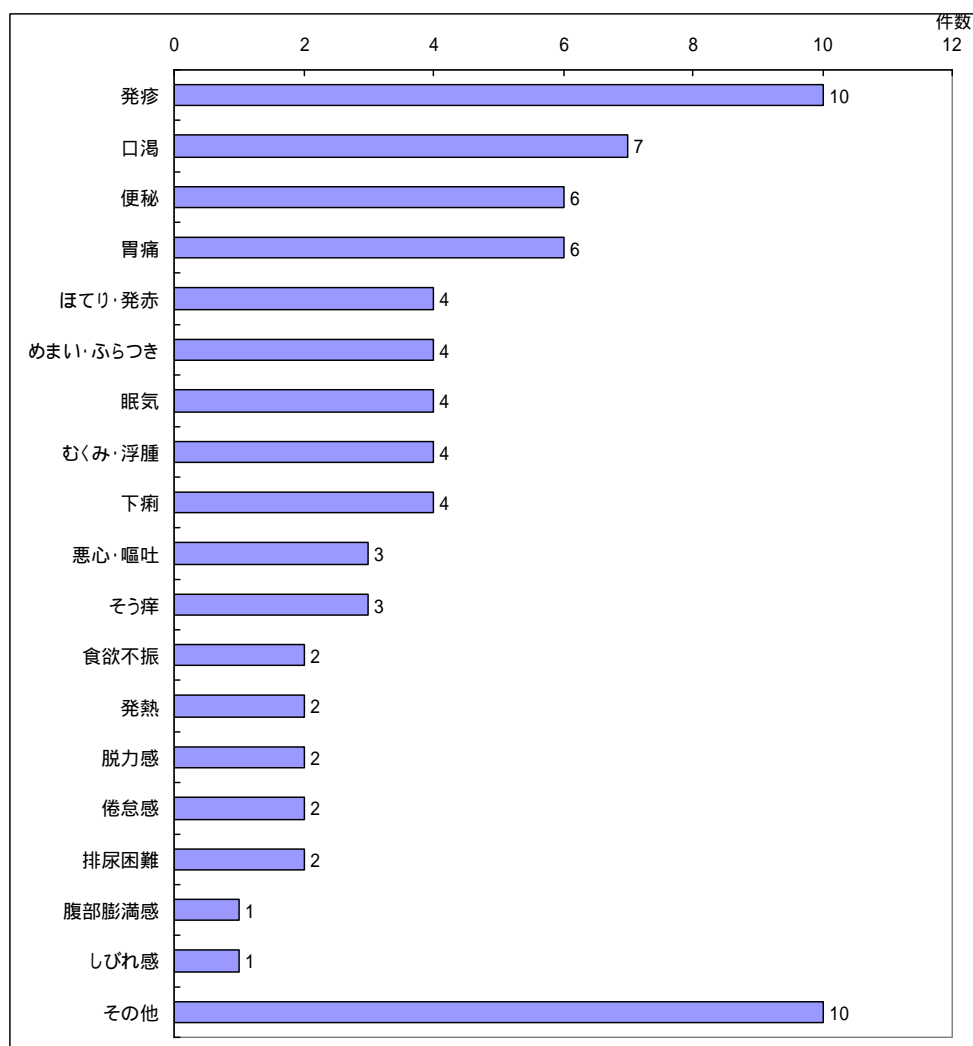
一方、患者等から相談のあった「副作用の主な症状」(複数回答)をみると、「発疹」10件、「口渇」7件、「便秘」6件、「胃痛」6件などの順となっています。(表12、図9)

〔表12〕副作用の主な症状(複数回答)

(件)

発疹	10	口渇	7	便秘	6
胃痛	6	ほてり・発赤	4	めまい・ふらつき	4
眠気	4	むくみ・浮腫	4	下痢	4
悪心・嘔吐	3	そう痒	3	食欲不振	2
発熱	2	脱力感	2	倦怠感	2
排尿困難	2	腹部膨満感	1	しびれ感	1
その他	10	延べ件数 計	77		

〔図9〕副作用の主な症状（複数回答）



（注）副作用に関する相談事例のうち、対象薬剤の薬効別分類が判明したもの

(2)その他の事業

都道府県薬剤師会並びに支部薬剤師会では、「薬と健康の週間」において、全国統一事業である「お薬相談」以外にも、様々な取り組みを行い、地域住民の医薬品の適正使用や健康増進に努めています。

以下に、都道府県薬剤師会並びに支部薬剤師会より報告のあった取り組みを紹介します。

医薬品の適正使用について（後発医薬品を含む）

講演会開催、お薬手帳の紹介・配付、リーフレット配付、パネル展示、ビデオ上映、ラジオ・テレビスポット放映、新聞記事掲載、お薬箱チェック、クイズ・アンケート実施、くすり博物館見学ツアー実施、服薬工夫・医薬品の管理方法紹介 等

禁煙の推進について

相談会・セミナー開催、一酸化炭素濃度測定、ニコチン濃度測定、リーフレット配付、パネル展示、ニコチンパッチ・禁煙グッズの説明、キャラバンカーでのPR、アンケート実施 等

薬物乱用防止について

相談会・講演会・ライブコンサート開催、パネル展示、リーフレット配付、新聞記事掲載、ビデオ上映、ラジオ・テレビスポット放映 等

介護について

相談会開催、まちかど介護相談薬局紹介、リーフレット配付、介護用品展示、おむつ等サンプル配付 等

健康食品について

相談会開催、試飲・試食、ビタミンチェックコーナー設置 等

薬局・薬剤師・薬剤師会の紹介

リーフレット配付、地域薬局地図の掲示・配付、ビデオ上映、子ども調剤業務体験コーナー（お菓子を服用）設置、寸劇上演 等

生活習慣病について

相談会・講演会・パネルディスカッション開催、紙芝居上演 等

アルコールについて

アルコールパッチテスト・依存症テスト実施、禁酒相談会開催 等

医薬分業の啓発

パネル展示、リーフレット配付、アンケート実施 等

薬草の紹介

薬草展示、薬草茶・薬草弁当の配付や作り方紹介、薬草探索ハイキング・講演会実施 等

健康測定

血糖、体脂肪、尿、血圧、血流、骨密度、筋肉量、基礎代謝量、BMI、水分量、身長、体重、毛根状態、肌状態、肺活量等の測定

環境衛生、公衆衛生関係

飲料水水質検査、手洗いチェック、雨水利用・森林保護・酸性雨・温暖化・ダイオキシン・アイドリング・シックハウスなどに関するパネル展示 等

その他

健康体操、世界エイズデーキャンペーンへの協力、乳がん相談コーナー・子育て応援コーナー設置、薬事衛生功労者の表彰、AEDのデモンストレーション、献血・骨髄バンクへの協力依頼、栄養士による食事指導、食中毒・インフルエンザ対策説明、災害対策説明 等

まとめ

今回の全国統一事業では、平成15～17年度と同様、薬局・薬店の薬剤師が、一般用医薬品の提供に際して必要な情報提供や服薬指導を行った上で、患者からの質問や相談に答えている実態を数字として明らかにできたものと考えます。

また、数字には表れていませんが、商品の指名買いの患者に対して薬剤師がよく話を聞いたところ、指名した商品が適当ではなかったケース、連用傾向がある患者に販売を行わなかったケース、薬剤師が「一般用医薬品での対応は難しい」と判断し、一般用医薬品は販売せずに医療機関への受診を促したケース、最小包装単位を優先して販売したケース、一般用医薬品の販売後に電話で相談を受けたケース、他の薬局・薬店で購入した一般用医薬品や配置薬等について相談を受けたケースなども、前年度までと同様に多数報告されています。

さらに、患者からの「一般用医薬品によると思われる副作用」の相談に対して、薬剤師がその症状等から判断し、使用の中止を指示したり、医療機関を紹介する等の対応をとっていることも、明確にすることができたものと思われます。

平成18年の改正薬事法を受け、平成21年度からは新たな一般用医薬品の販売制度が開始されます。本会では、今後とも一般用医薬品提供時の情報提供や相談業務の一層の充実に向けて、必要な施策を推進していく所存です。